2　研究の実際

(1)　学習指導要領における音楽科指導の考え方

ア　表現及び鑑賞の指導について

中央教育審議会答申（平成28年12月）において、小学校、中学校及び高等学校を通じた音楽科の課題が次のように示されています[1]。

> **感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められるところである。**
>
> 中央教育審議会　『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等改善及び必要な方策について（答申）』

この中で、我が国や郷土の伝統音楽に関わる指導については、これまでの成果を踏まえて、更なる充実が求められており、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めることについては、今回の改訂において、特に強く打ち出している部分です。

また、音楽科で育成すべき資質・能力は三つの柱で整理されており、音楽科の目標や内容についても、このことを踏まえた示し方となっています。

第２学年及び第３学年の表現領域（歌唱分野）と鑑賞領域の指導事項は、次のとおりです。

〔表現領域（歌唱分野）〕

思考力、判断力、表現力等	ア　歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫すること。
知識	イ(ｱ) 曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わり イ(ｲ) 声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり
技能	ウ(ｱ) 創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声，言葉の発音，身体の使い方などの技能 ウ(ｲ) 創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能

〔鑑賞領域〕

思考力、判断力、表現力等	ア　鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら，次の(ｱ)から(ｳ)までについて考え，音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。 (ｱ) 曲や演奏に対する評価とその根拠 (ｲ) 生活や社会における音楽の意味や役割 (ｳ) 音楽表現の共通性や固有性
知識	イ(ｱ) 曲想と音楽の構造との関わり イ(ｲ) 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史，他の芸術との関わり イ(ｳ) 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と，その特徴から生まれる音楽の多様性

また、中学校学習指導要領解説編（平成29年６月）の「指導計画の作成と内容の取扱い」の指導計画作成上の配慮事項の中で、各領域や分野の関連については、次のように示されています。（下線部は研究者が付したもので、本研究に関わる部分）

> **〔共通事項〕を要として各領域や分野の関連を図るようにすることとは、<u>その題材の学習において主として扱う音楽を形づくっている要素やそれらに関わる用語や記号などを共通に設定して複数の領域や分野を関連させた一題材を構想したり</u>、主として扱う音楽を形づくっている要素やそれらに関わる用語や記号などの一部を共通にして、学びの連続性や系統性などをねらって複数の題材の配列の仕方を工夫したりすることなどである。**
>
> 文部科学省　『中学校学習指導要領解説音楽編』　平成29年６月　第４章１

図１の「音楽科、芸術科（音楽）における学習過程のイメージ」[3]にあるように、歌ったり、楽器を演奏したり、音を出したり、聴いたりしながら、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連の働きが生み出すよさや面白さ、特質や雰囲気等を感受したことを支えとした学習過程が重視されていることが分かります。

図１　音楽科、芸術科（音楽）における学習過程のイメージ

クリック！　⇐ 拡大図はここをクリック

そこで、 音楽科の目標に掲げられているように、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、生徒が自ら「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などとを関連付ける」[4] 音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するために、我が国の伝統音楽の学習において、表現領域と鑑賞領域を関連付けた題材構成を工夫することが有効だと考えました。

イ　我が国の伝統音楽の指導について

中学校学習指導要領解説音楽編（平成29年６月）の「内容の取扱いと指導上の配慮事項」には、我が国の伝統的な歌唱の指導に当たっては、言葉と音楽との関係、姿勢や身体の使い方についても配慮するよう示されています。生徒に対して、これらをきまりや知識として教えるだけでなく、どうしてそのように歌うとよいのかということについても考えさせながら、その意味を理解させることが重要です。また、前述の解説では、鑑賞の指導においても、我が国や郷土の音楽のよさや美しさを味わい、我が国や郷土の音楽を大切に思う心を育むことを通して、諸外国の音楽のよさや美しさ、そしてそれを大切にする人々の気持ちを理解し尊重する態度を育むことの重要性が述べられています。さらに、我が国や郷土の伝統音楽を学校の授業で扱うことは、伝統音楽の伝承・発展につながると考えられます。

(2)　我が国の伝統音楽の学習における表現及び鑑賞の指導の考え方と手立て

ア　表現領域と鑑賞領域を関連付けた題材構成の工夫について

小島律子は、〈表現〉とは何か、ということについて「鑑賞でも自分の楽曲の味わいを人に伝えたい、共有したいという欲求から〈表現〉が始まる。楽曲という「外的世界」からの働きかけによって生じた自分の〈内なるもの〉を、表現媒体を通して自分の外に表したいと欲求する。この〈内なるもの〉とは、過去の経験、観察、記憶、イメージ、思考、情動、感情などが絡み合って起こすこころの動きであることは表現領域と同様である。」[5]と述べています。このことから、鑑賞の授業が受動的でなく、主体的、創造的な学習になるよう、生徒が楽曲から味わったものを言語で発信する活動を取り入れることが有効ではないかと考えられます。それは、歌唱のような表現活動が主体的、創造的な学習となるためにも同じことが言えるでしょう。また、「カリキュラムとしては、伝統音楽は人びとの生活という広い土壌を背後に持って存在していることから、音楽を形づくっている要素や手法を中心に、その音楽が生まれ享受されてきた背景（風土や文化や歴史等）、および踊りや演劇等の音以外の諸媒体とのかかわりを視野に

入れる必要がある。」[6]とも述べています。伝統音楽を学習する際には、他教科の学習内容や日常生活の中で得たものを時代背景等と結び付けながら学習することが大切なことであると言えます。これらの考え方を基に、我が国の伝統音楽の学習において、生徒が経験したことや既習の内容を生かし、表現の学習活動と鑑賞の学習活動を関連付ける授業展開を行うことを考えました。その中で、生徒が知識・技能を習得・活用しながら、長唄の音楽表現を創意工夫することは、歌舞伎を鑑賞する上で、受動的でなく主体的に歌舞伎の音楽や演技に親しんでいく態度が養われることにつながるのではないかと考えました。

また、検証授業前の生徒に「日本の伝統音楽への興味・関心について」の質問紙調査を実施したところ、次のような結果が得られました。

① 「歌舞伎」と聞いて、知っていることやイメージすることが「ある」と答えた生徒は74%
② 「長唄」という言葉を聞いたことが「ある」と答えた生徒は３％
③ 「長唄」という音楽を聴いたことが「ある」と答えた生徒は６％（長唄鑑賞後、回答）

生徒は、長唄とは知らずに耳にした経験はあったと考えられますが、①で「ある」と答えた74%の生徒の回答内容としては、歌舞伎役者の名前や隈取、見得のような外見的な気付きを挙げており、日常生活の中で視覚的に受けた印象が強かったことがうかがえます。「このような音楽を聴いてどのように感じますか」という質問では、声や楽器の音色、音階等の旋律、日本の伝統音楽における「間」等、音楽を形づくっている要素を知覚した回答や「和を感じる」や「昔の音楽」という音楽を感受した回答がありました。声に関しては「響いている」「きれいだ」「おもしろい」と好意的に感じている生徒が多いことも分かりました。

生徒の回答を基にして、生徒が知覚・感受したことを生かしながら、歌舞伎を鑑賞したりその特徴を捉えた発声で歌ったりし、歌舞伎に親しんでいく態度を養うことができるようにするために、歌舞伎の鑑賞と長唄の歌唱を組み合わせ、表現領域の歌唱分野と鑑賞領域との関連を図ることは有効であると考えました。長唄を歌うことにおいて、生徒が知識・技能を習得・活用しながら表現の工夫をするとは、言い換えると、産字や唄い尻の表現の特徴を知識として理解して表現している姿と捉えます。

イ　歌舞伎や長唄の特徴を他者と共有する学習の手立てについて

阿部昇は、主体的・協働的に学習に取り組むためには言語にこだわることとし、「ある楽曲を聴いて私たちがそれなりの感想をもったり感動したりするのは、内言が働いているからである。音楽も意識してもしなくても、内言で音を解読している。音楽の場合も、評価・批評したり語り合う際は、内言を外言化している。」[7]と述べています。これは、生徒が楽曲を聴いた後の気付きや感想を学級やグループの中で出し合うことが、その曲についての自分の思い等を他者に伝えることにつながることと考えられます。また、特に協働的な学びについては、「グループを生かしたアクティブ・ラーニングは、子どもたちの主体性を引き出し、外言化の機会を飛躍的に増やし、異質性・多様性を生かすことで質の高い試行錯誤や発見を生み出すなど優れた教育方法と言える。」[8]とも述べています。生徒は、楽曲から聴取した特徴や学習した内容を他者と共有することで、その特徴や内容についての様々な意見を聞き、楽曲に対する見解を深めていくと考えます。そこで、本研究では、生徒が歌舞伎や長唄のよさや美しさを味わって聴くことができるようになるために、歌舞伎や長唄の学習において、その特徴を他者と共有する学習を取り入れることにしました。具体的には次のような手立てを取ります。

・歌舞伎の伴奏音楽である長唄の模範演奏を視聴した後、長唄の歌唱における発声や奏法につ

いて確認するために、隣の席の友達と知覚・感受したことの意見交換をさせる。歌唱時間を確保するために、話合い活動はペア活動とする。

・歌舞伎「勧進帳」の後半部分の視聴を受けて、長唄の役割や効果を考えさせるときにグループによる話合い活動を位置付ける。話合い活動では、音楽科の特質に応じた言語活動が行えるよう映像を視聴しながら意見を出し合わせる。その際、生徒が自分の考えと友達の考えを比較したり、グループの友達と意見交換を深めたりできるよう、その考えに納得できるかできないかをワークシートにマーキングしながら記入し交流させる。

・歌舞伎「勧進帳」のあらすじを確認したり歌舞伎の特徴をまとめたりする際、自分の考えと比較したり、友達の考えに共感したりして自分の考えを深めるために、学級全体で意見交換をさせる。また、社会科で学習した歴史の内容と関連付けながら考えさせ、歌舞伎が草創、確立した頃の時代背景等を推し量りながら意見を出し合う場を設ける。

　このような手立てを取ることで、長唄の音楽表現を創意工夫できたか、また、歌舞伎や長唄のよさや美しさを味わって聴くことができたか、さらには、歌舞伎に親しんでいく態度が養われることにつながったかを授業中の発言やワークシートの記述から捉え、検証します。

(3)　授業実践（中学２年）

ア　指導計画

(ｱ)　**題材**　長唄の歌唱や歌舞伎の鑑賞を通して、日本の伝統音楽のよさを味わおう

(ｲ)　**教材**　歌舞伎「勧進帳」　　三世並木五瓶　作／四世杵屋六三郎　作曲
　　長唄「勧進帳」

(ｳ)　題材とその指導について

　中学校学習指導要領には、音楽文化についての理解を深めることが規定されている。表現領域においては曲種に応じた発声で歌うこと、鑑賞領域においては音楽の特徴とその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連して理解すること、我が国や郷土の伝統音楽の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解することが提示されている。平成29年３月に示された新学習指導要領音楽編では、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することが求められるようになった。

　本題材では、歌舞伎を鑑賞するという鑑賞領域と長唄を歌うという表現領域を関連させながら学習できる歌舞伎「勧進帳」を教材とした。安宅の関での関守「富樫左衛門」と「義経」をかばう「弁慶」の問答が見どころである歌舞伎十八番の「勧進帳」は、その舞台となる時代背景や登場人物については歴史の授業でも学習しているため、生徒にとって把握しやすい物語の内容であると考える。また、この教材で、生徒たちが現代の音楽文化と比較しながら歌舞伎が草創された時代背景を理解したり、なぜその音楽が流行し現代まで受け継がれているかを考察したりし、歌舞伎を学習させたい。そのような学習を実現するに当たって、教材に「勧進帳」を用いることにより、歌舞伎という音楽劇を表現及び鑑賞の両面から学習させ、音楽文化と豊かに関わる生徒を育成したいと考える。

　指導に当たっては、生徒が歌舞伎に出てくる長唄の旋律や音色、「間」を知覚したり、生徒が今まで歌ってきた西洋的な発声と比較したりしながら長唄を歌わせたい。長唄を歌う学習活動を通して生み出された歌舞伎のよさや面白さ、特質や雰囲気を感受したことを他者と共有したり、歌舞伎が草創、確立された当時の時代背景を学習したりできるよう、鑑賞や歌唱の学習

活動の組合せを工夫したい。また、鑑賞、歌唱した後の話合いの場面では音楽を聴いたり口ずさんだりしながら、生徒が根拠をもって意見交換ができるよう配慮し、生徒にとっての音楽の価値を考えさせていきたい。

(ｴ)　題材の目標

・歌舞伎についての知識や長唄を歌う技能を習得、活用しながら、音楽表現を工夫したり、よさや美しさを味わって聴いたり、時代背景等と関連付けたりする学習に主体的に取り組む。【関心・意欲・態度】

・長唄を歌う声の音色や旋律の特徴を知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、長唄にふさわしい声や言葉の特性を生かした表現を工夫する。【表現の創意工夫】

・長唄の発声、発音、身体の使い方等の技能を身に付けて歌う。【表現の技能】

・音楽を形づくっている声や楽器の音色・旋律、日本の伝統音楽における「間」を知覚し、それらの働きが生み出すよさや面白さ、特質や雰囲気を感受しながら、背景となる文化や歴史と関連付けたり、その音楽の価値を考えたりして鑑賞する。【鑑賞の能力】

イ　授業の様子

時	◆ねらい　○学習活動	教師の働き掛け	●評価規準　【評価方法】
第1時	◆長唄のよさや美しさを味わう学習に主体的に取り組む。 ◆長唄の発声、発音、身体の使い方などの技能を身に付けて歌う。		
	○事前アンケートを基に、長唄を聴いて気付いたことや感じたことを共有する。	事前アンケート（長唄聴取後）の回答内容 ・声や楽器の音色、音階等の旋律 ・日本の伝統音楽における「間」 ・「和を感じる」「昔の音楽」 ・声に関しては： 「響いている」「きれいだ」「おもしろい」 「キーキーした声でうるさい」「つまらない」	
	鑑 歌舞伎「勧進帳」の冒頭の場面を視聴し、どのような場面かを想像する。	・知覚・感受したことを自由に発言させた。 ・視聴後に登場人物や舞台となっている場所、時代を確認した。	●歌舞伎についての知識や長唄を歌う技能を習得しながら活用する学習に主体的に取り組もうとしている。 【観察】 【ワークシートの記述】
	鑑 長唄「勧進帳」の「これやこの～山かくす」を視聴する。	・ＤＶＤの模範演奏を視聴し、気付きをワークシートに記入させた。	
	他者との共有	・気付きをグループや全体で共有し、長唄の特徴をつかませた。	

	表 長唄「勧進帳」の「これやこの～山かくす」を歌う。	生徒の気付き ・母音を延ばす（息が長い）。 ・母音を延ばしながら、音程を変える。 ・ゆっくり、はきはき ・背筋を伸ばし、おなかの底から息を出す。 ・長唄の特徴を生かし、歌詞や楽譜を参考にしながら、ＤＶＤやＣＤに合わせて歌わせた。 生徒の反応 ・正座して歌った方が良い。 ・背筋を伸ばすとよく声が出る。 ・楽しく学習できた。 ・思ったより難しかった。 ・次はもっと声がでるようにしたい。	●長唄の発声、発音、身体の使い方などの技能を身に付けて歌っている。 【観察】
第2時	◆歌舞伎の特徴を理解し、歌舞伎のよさや面白さ、雰囲気を感じ取る。		
	表 前時を想起しながら、長唄を歌う。	・前時で学習した長唄の特徴を踏まえて歌うよう促した。 	
	○歌舞伎の概要について知る。	・歌舞伎の成り立ち、「勧進帳」のあらすじについて説明した。	●歌舞伎の音楽のよさや美しさを味わって聴いたり、時代背景や人々の暮らしと関連付けたりする学習に主体的に取り組もうとしている。 【観察、ワークシートの記述】
	鑑 歌舞伎「勧進帳」を視聴する。 他者との共有	・歌舞伎「勧進帳」を視聴後、音楽や演技について気付いたことをワークシートに記述させた。 ・ワークシートの記述を基に気付いたことについて意見交換させた。	●長唄における声や楽器の音色、旋律、日本の伝統音楽における間を知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気を感受している。 【観察、ワークシートの記述】

		生徒の気付き ・セリフの内容は理解できなかったが、言っている様子で感情が伝わってきた。 ・音楽が場面に沿っていた。 ・劇がたくさんの人で成り立っていた。 ・難しくてよく分からなかった。	
第3時	◆歌舞伎における長唄の音楽の役割や効果を考え、音楽の背景となる文化や歴史と結び付けたり、価値を考えたりしながら「勧進帳」を鑑賞する。		
	表　長唄「勧進帳」の「これやこの～山かくす」の部分を歌う。	・前時までの長唄の歌唱について想起させ、唱法や特徴を確認した後、歌わせた。 ・確認した唱法 【長唄らしい声の特徴】 1　腹式呼吸を基本とすること 2　持ち声を生かし、基本的には地声で歌う 3　細かいビブラートはかけない 4　言葉がわかるように発音する	●声の音色や長唄の旋律の特徴を知覚し、その働きが生み出す雰囲気を感受しながら、長唄にふさわしい声や言葉の特性を生かした表現を工夫している。 【観察】
	鑑　歌舞伎における長唄の役割や効果を考える。 他者との共有	・舞踊や演技の場面を視聴し、歌舞伎における長唄の役割や効果について考えさせた。 ①　長唄の役割や効果をワークシートに記入させた。 ②　各グループで意見交換をさせた。 ③　話し合った内容を発表させ、その発表内容を全体で共有させた。 	

	○歌舞伎の音楽についてまとめる。	生徒の発言 ・唄はナレーションの役割を果たしている。 ・演技に迫力が出る。 ・盛り上がる場面で長唄が演奏される。 ・場面で、唄方や三味線方の役割が違う。 ・歌舞伎をわかりやすく説明している。 ・長唄を歌ったり歌舞伎を鑑賞したりして学習した歌舞伎の特徴やよさをまとめさせた。 生徒のまとめ ・かぶき踊りに歴史上の人物やその時の流行を取り上げた劇の要素が加わった。 ・三味線や笛などの他の芸能の要素を取り入れながら、総合芸術として発展し、現在も続いている。 ・井原西鶴らが活躍した時代で、現在で言うと又吉の小説が映画やドラマになったようなことと似ているのではないかと思った。	●歌舞伎の音楽の背景となる文化や歴史と関連付けたり、その音楽の価値を考えたりして鑑賞している。 【観察、ワークシートの記述】

(4)　実践結果の考察

ア　知識・技能を習得・活用しながら長唄の音楽表現を創意工夫することについての考察

検証授業を行った学級では、「歌舞伎」と聞いてイメージするものにテレビや映画で活躍している歌舞伎役者の名前や隈取、見得等を挙げており、外見に強い印象を受けている生徒が少なくありませんでした。また、長唄を聴いたことがあるとはいえ、子供向けのテレビ番組でなら長唄を聴いたことがあるという程度で、しかも学級の６％しかいないような状況でした。

長唄の歌唱における学習では、ＣＤやＤＶＤを活用した模範演奏の視聴による聴取、長唄が演奏される場面視聴後の長唄を歌うという授業を行いました。模範演奏の視聴後に行った聴取では、以下のような発言が多くの生徒が出されました。

「母音を延ばす」「息が長い」「母音を延ばしなが音程を変える」
「発音はゆっくり、はきはきと」「背筋を伸ばし、おなかの底から息を出す」

長唄の発声や産字、唄い尻の表現に気付き、それを隣の席の友達と共有しながら長唄を歌うことに生かそうとしていました。そして、その気付きを基に模範演奏に合わせて長唄を歌う際には、生徒の中から、

「正座して歌った方がいい」「背筋を伸ばして歌った方が、声がしっかり出せる」

という発言がありましたが、声量や発音に気を付けて歌うというところにとどまっていました。

第３時では、唄方のように並んで正座して歌ったり、歌舞伎の映像に合わせ、舞台上で演奏しているような雰囲気の中で歌ったりするようにさせました。声量や発音は自身を持って歌える生徒が増え、さらに、第１時ではうまくいかなかった産字や唄い尻のような唱法に気を付けて歌えるようになりました。低音部分は声が出しづらそうな生徒もいましたが、長唄の学習を積むにつれて、旋律の抑揚を生かしながら歌っている姿を見ることができるようになりました。

〔抽出生徒Aの変容〕

第１時では長唄に興味を持っている様子がなく、模範演奏を視聴している間も集中力に欠ける感じでした。しかし、第２時で実際に声を出してみると、発声や発音がよくできており、意見交換の場面では、グループにおいても学級全体においても積極的に発言していました。

第３時では、歌舞伎における長唄の効果について、「長唄があることによって、歌舞伎の演技が全体的に盛り上がり、長唄がある場面はさらに強調される」と発表し、長唄の歌唱においても、歌う度に産字や唄い尻の特徴を掴み、抑揚を付けながら歌えるようになっていきました。さらに、学級全体で歌うときには集団をリードし始め、生徒Ａの歌声を支えにして歌っている生徒もいました。

このように、表現領域と鑑賞領域の関連を図った題材構成による授業展開を仕組んだことで、生徒が知識・技能を習得・活用しながら長唄の音楽表現を創意工夫する姿が見られるようになりました。

イ　歌舞伎や長唄のよさや美しさを味わって鑑賞することについての考察

○　検証授業後、「『長唄』を聴いたり歌ったりすることによって、『歌舞伎』を味わうことができたか」という質問をしたところ、「よくできた」17%、「できた」83%という結果が得られ、生徒は、次のように述べていました。

・長唄の歌い方や歌舞伎を観るときの注目する点を知ることができた。
・ふだんは聴くことのない音楽を聴くことができた。

○　歌舞伎の中での長唄の役割や効果を考え、特徴を掴む学習に取り入れたグループで意見交換をするという言語活動では、歌舞伎「勧進帳」の後半場面の視聴しながら意見交換をしたり、友達の意見に納得できるかできないかをワークシートにマーキング（納得できることには「！」、納得できないことには「？」）しながら交流したりしました。グループ活動における生徒の主な発言は以下のとおりです。

・大事な場面で使われる！　　・場を盛り上げる！
・動きの効果音になっている！　・場面が分かりやすくなる！
・役者を引き立てていた？

「グループでの意見交換において、友達の意見は参考になったか」という質問には、「とても参考になった」「参考になった」と回答した生徒は併せて95％でした（**図２**）。また、感想の中にも、「自分とは違う意見を聞くことができ、考えが深まった」と記述しているものが多く見られたことから、生徒はグループによる話合い活動に対して有用性を実感できることがうかがえます。

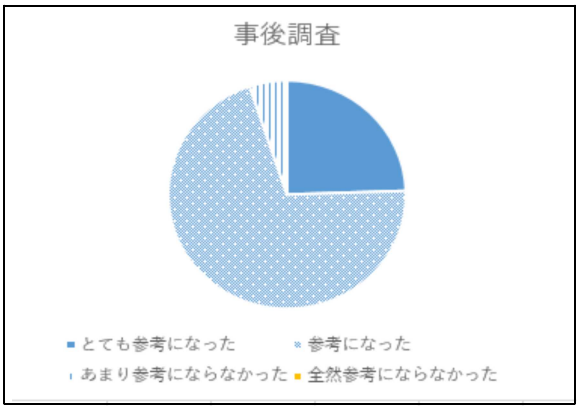

図２　グループ活動における意見の共有について

○　歌舞伎「勧進帳」のあらすじを確認したり歌舞伎の特徴をまとめたりする際に、登場人物や江戸時代の町人文化について質問すると、生徒は社会科の歴史の授業で学習した内容を次々と答え、その話題を共有することができました。生徒の主な発言は以下のとおりです。

・義経は兄の頼朝と不仲になって、京の都から追われる身となり、「これやこの～」の場面では都から離れてしまったことを寂しく思ったのではないだろうか。
・江戸時代の町人文化として、井原西鶴や近松門左衛門のことを習ったけれど、今で言ったら、又吉の「火花」が小説から映画やテレビドラマになるようなことかな。
・歌舞伎ってベートーヴェンの音楽より古いんだよね。

他教科の既習内容と関連付けた学習をすることで、歌舞伎の演目となる史実を確認したり、歌舞伎が草創、確立された当時の文化と現在を関連付けたりする上で、音楽の授業だけでは説明し尽くせない内容を補うことができると言えます。そして、このことによって生徒はこれまで学習したことを活用し、我が国の伝統音楽について味わいを深めることにつながると考えられます。

○　検証授業前は、長唄を聴いた後の「このような音楽を聴いてどのように感じますか。」という質問に、声や楽器の音色、音階等の旋律、日本の伝統音楽における「間」等を知覚した回答や「和を感じる」や「昔の音楽」という感受した回答があったり、声に関して「響いている」「きれいだ」「おもしろい」と好意的に感じたり、「キーキーした声でうるさい」「つまらない」と批判的であったりと、様々なイメージを持っていました。検証授業後に、我が国の伝統音楽の一つである「歌舞伎」に対するイメージについて質問したところ、**図３**のようなイメージの着眼点の変容が見られました。

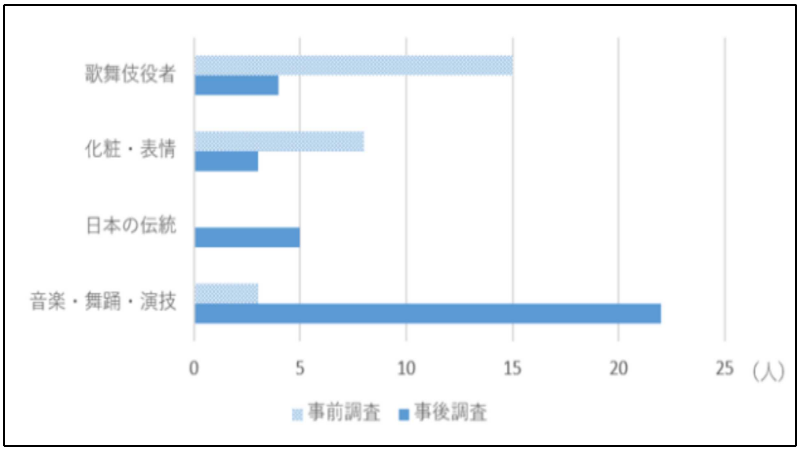

図３　「歌舞伎」についてのイメージの着眼点の変容

また、「歌舞伎」に対するイメージについて、生徒は次のように記述しています。

・歌舞伎は、音楽、舞踊、演技が一体となっているものであるとイメージできるようになった。
・役者の独特な台詞回しや長唄の抑揚、唄い尻に興味・関心を持つようになった。
・どうでもいいと思っていたけれど、詳しく知りたくなってきた。
・あまり興味がなかったけど、歌い方が独特でおもしろかったし、見ていて楽しかった。

これらのことから、他者と共有する学習を取り入れたことで、生徒は歌舞伎や長唄のよさや美しさを味わって鑑賞していると考えます。

そして、生徒は、次のような学習のまとめをしていました。

・長唄があるから物語が分かりやすくなった。
・歌舞伎の演目として、歴史上の出来事を扱うものがあるということを理解できた。
・歌舞伎という芸能に日本の伝統を感じるようになった。
・日本の伝統的なものだから、後世にも残していかなければならないと思った。
・それに興味を持てば、今まで知らなかったことをいろいろ知ることができると思った。
・歌舞伎「勧進帳」がおもしろかったので、実際に劇場で観てみたい。

波線部から、生徒は歌舞伎のよさや面白さを理解し、後生に歌舞伎を残していきたいという自分にとっての価値を見いだすことができたと考えます。このことから、生徒は歌舞伎に親しんでいく態度を養っていることがうかがえました。

《引用文献》

(1)　文部科学省　『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等改善及び必要な方策について（答申）』　平成28年12月　第２部第２章７

(2)(4)　文部科学省　『中学校学習指導要領解説　音楽編』　平成29年６月　第１章２第４章１

(3)　中央教育審議会　『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等改善及び必要な方策について（答申）』　平成28年12月　別添８－３

(5)(6)　小島　律子　『【シリーズ・新時代の学びを創る】６　音楽科　授業の理論と実践』　平成15年　あいり出版　pp. 9-10

(7)(8)　阿部　昇　『確かな「学力」を育てる　アクティブ・ラーニングを生かした探究型の授業づくりー主体・協働・対話で深い学びを実現するー』　2016年　明治図書　p. 74、p. 94